荒木寛二作「家族 」

＜前編＞「心が見えない」

伊藤美幸ナレーション　秋の日差しもさわやかな午後、わたしたちは学校に通じる並木道を歩いている。下校生が次々と追い越してゆく。

生徒 A　先輩、お先に。

ナレーション　そう声をかける下級生のクラブ員に目であいさつを返しながら、わたしたちは話し続ける。わたし、伊藤美幸。青春中学 3 年。放送部のリーダーで、自分で言うのもなんだけど、みんなから信頼されて散る頼もしい部長さん。わたしの話し相手は親友の中井瑠美だ。

中井瑠美　美幸。部のほう、うまくいってるの？　もう引退したのかと思ったらまだやってるわけ？

美幸　そうなのよ。なかなか引退できないんで、少々焦ってんのよ。わたしはね、後任は 2 年生の太田君がいいなと思って、みんなに話したんだけど、どうもみんな賛成じゃないみたい。やれリーダーシップがないの、計画性がないのって、煮え切らないの。おまけにその話をしてから、太田君に対するほかの部員の態度がヘンに冷たくなって、シカトしているみたいなの。あんなウジウジしてんのほんと嫌いよ。なんか太田君に悪いことしたみたいで、こっちまで悩んじゃうわ。

瑠美　そうね。案外よくあることよ。「あいつ、ひいきされてる」なんてだれかが言い始めると、すぐ「そうだ、そうだ」と口を合わせるのがいるからね。そうなったら、もう選挙で決めるしかしょうがないね。

ナレーション　中 3 のわたしにとっては、部活とともに、間近に迫ってきている高校入試は、越えなければならない大きな山だ。普通なら部活は終わり、入試に追い込みダッシュをかける時なんだけど、今ひとつ気が乗らず、力が入らないので、気持ちは焦るばかり。

太田一郎　先輩、お先に。

美幸　ああ、太田君。ちょうどよかった。今、君の話をしていたところなの。一度謝ろうと思っていたんだけど。わたしが君の名前を出したので、イヤな思いをさせてんじゃないかと思って。ごめんね。

太田　あの…。

美幸　うん？

太田　実は僕、部活をやめようと思っているんです。前から男子が少ないし、イヤなこともあったけど、放送が好きだから、今まで続けてきたんだけど…。なんかこのごろ、みんなと一緒に放送をやろうと思っても、相手にされないこともあっ

て。

瑠美　シカトされているのね。美幸、なんとかしなけりゃまずいんじゃない？　顧問の先生に相談するかして。

ナレーション　わたしはもう、逃げ出したいという思いと、なんとかしなければいけないという責任感の板挟みで、とっさに言葉が出てこなかった。

太田　それじゃ先輩、失礼します。

ナレーション　わたしは、心なしか肩を落として立ち去る太田君を見送ると、重い足取りで家に帰った。

美幸の母　お帰り。…どうしたの、黙り込んで？　何か学校であったの？

美幸　部活で少し問題があって…。
何よ、みんな。わたしの立場や気持ちを少しも考えてくれないで。自分勝手に言いたいこと言って。一度でいいから自分で責任持ってみればいいのに。太田君のどこが気に入らないのよ。少しのろまだけど、一生懸命やってるじゃない。あれで彼がやめでもしたら、男子はほとんどいなくなって、困るのは自分たちなのよ！

母　何よ、突然怒り出して、びっくりするじゃないの。部活も大変だろうけど。そろそろ勉強に力を入れなくちゃね。今回は受験する人も多いし、急に学校が増えるわけでもないし、一段と難しいらしいわよ。担任の先生、この前の三者面談でおっしゃってたでしょう。ゆうべもお父さんとそのことで話し合っていたのよ。みんなも心配しているんだから、あなたも頑張ってね。

ナレーション　母の言葉を、わたしは黙って聞いていた。母の言うこともっともだと思う反面、部のほうもなお気がかりで、なんとかしなきゃ。あー、悩んじゃうなぁ。
夕食の後、勉強を終えてそろそろ寝ようとしていた時、電話がかかってきた。

（効果音）　(ナレーションのバックで電話音)

母　（〃）もしもし、伊藤ですが。

ナレーション　“また遅くなったお父さんからの電話だな”と思ったけど、母の様子はいつもと少し違う。

母　先生、今、美幸がここに来ましたので、お話くださいますか？　少しお待ちください。

美幸　お父さんからじゃないの？

母　放送部の山田先生よ。太田君という 2 年生が放送部にいるんでしょう？　その子が夜になっても家に帰ってこないんですって。

美幸　え?!　わたし出る。もしもし、伊藤です。先生、太田君がいないんですって？　わたし、学校からの帰りに彼と会いました。

山田先生　（フィルター音）伊藤、太田の様子、ヘンじゃなかったか？

美幸　ちょっと元気がないようでしたけど…。

山田先生　どうもいじめに遭っていたらしいんだ。わたしもうっかりしていたが、太田も無口なほうだから、つい見落としていたようだ。彼のお母さんから担任の内田先生に電話があり、内田先生からわたしのほうにも連絡があったんだ。夜遅く悪かったが、何か気がついたことがあったらと思って。

ナレーション　わたしは、太田君がいじめに遭っていたと先生から聞かされ、ショックを受けた。部長として、彼のことはよく知っているつもりが、何も知らなかったからだ。

美幸モノローグ　これじゃ部長失格じゃん。

ナレーション　わたしは、自分のふがいなさに力が抜けてしまった。次の日、学校で、放送部の山田先生から太田君のことを聞いた。

山田先生　ゆうべは心配をかけたなぁ。彼、今日は元気で学校に来ているよ。いろいろ聞いてみると、お母さんがバーで働いていることをいろいろ言われたらしいんだ。それに昨日は、「太ってダサい、ダサい」と言われ、彼も発奮してみんなをあっと言わせてやろうと思って盛り場に出かけたんだ。そこでカッコいい洋服を、小遣いをはたいて買ったまでは良かったんだが、つい映画を見て遅くなるわ、帰りの小銭までなくすわで、帰るに帰れなかったんだそうだ。ウロウロしているところを、運よく補導員に見つけられて、帰ることができたんだそうだ。ドジと言えばドジだよな。

ナレーション　わたしは、太田君がどうにかなってしまったのではという思いが、一瞬に消え、ほっとした。
間もなくわたしは部活も引退し、いよいよ勉強にラストスパートをかけ始めた。両親も、本気で勉強に打ち込んでいるわたしを見て、内心ほっとしているようだった。もう一人、わたしを励ましてくれる人がいた。通っている塾の今井先生で、クリスチャンの彼女をわたしは姉のように慕っていた。

今井先生　伊藤さん、頑張っているわね。この調子で突っ走るのよ。希望が丘高校のゴールも夢ではないわよ。わたしも力が入るわ。分からないことがあったら、いつでも聞いて。お母さんと先日お会いしたけど、喜んでおられたわ。

美幸　はい、頑張ります。あのう、先生、中井さん今日来てないようですが、どうかしたんでしょうか？　ここんとこ、学校でもあまり話す機会がなくて。このごろ瑠美、少し元気がないみたいで。

今井先生　中井さんとは、いいライバルだものね。このところ、中井さん、少しスランプなのよ。頑張っているようだけど、成績が今ひとつ上がらないのよ。少し焦っているんじゃないかしら。会ったら励ましてあげて。二人とも、希望の高校に入れること、先生祈っているわ。

ナレーション　今井先生の言葉もあり、わたしは帰り道、瑠美の家を訪ねた。玄関に出てきたお母さんの話では、風邪で寝ているとのことで瑠美には会えなかった。わたし春美を励ましたかった。でもそれ以上に、わたしもこの調子で頑張ると希望の

高校に入れるとの今井先生の励ましを瑠美に聞いてもらいたかった。常にわたしの先を行っていた瑠美に、少しでも追いついたことを、一緒に喜んでもらいたかったのだ。だがその思いが、彼女の激しい嫉妬(しっと)心を呼び起こそうとは、夢にも思わなかった。

(効果音)　(教室のガヤ)

瑠美　美幸。昨日たずねてくれてありがとう。でもわたしのこと、あんまり気にかけないで。わたしはわたし、あなたはあなたなんだから。

美幸　え？　どういうこと、瑠美？

瑠美　自分が調子いいからって、見せびらかさないでってこと。わたしだって頑張るときは頑張るんだから。

美幸　何もわたし、見せびらかしてない。やっと少し瑠美に追いついたから、喜んでもらえるかなと思っただけなのになぁ。

瑠美　そうなの。でもわたし、あなたのこと素直に喜べないのよ。あなたも志望校、希望が丘に変えたんでしょ？　わたしと同じじゃない。

美幸　だから、二人とも頑張って入ればいいじゃない。そうすれば最高じゃない。

瑠美　あなたが入って、わたしが入れなかったらどうすんのよ。こっちは惨めな笑いもんよ。あなた、考えが甘いのよ。自分のことっきゃ考えてないんだから！

ナレーション　うかつだった。瑠美は入試間近の緊張と焦りの中に置かれ、冷静に考えられなくなっていた。親友であるはずのわたしにも、親しさよりもライバルとしての恐れを強く感じるようになっていたのだ。

美幸　瑠美、ごめん。ただわたし、いつも心配してくれてたあなたに、少しでも喜んでもらおうと…。

瑠美　(さえぎる)その無神経さがムカつくんだよね！　はっきり言って、希望が丘入るまでは、あんたは“敵”よ。美由紀、今井先生も両親も喜んでくれたって言ったけど、本当はどうかな。美幸は知らないかもしれないけど、あなたのお父さんもお母さんも、本気であなたのことなんか心配してくれるはずないと思うな。だってあの人たち、あんたの本当の両親じゃないんだもの。

美幸　え？　なんて、今なんて言ったの？

瑠美　(エコー) あの人たち、あんたの両親じゃないのよ！

ナレーション　わたしの全身から、スーッと血が引いていった。

＜後編＞「愛に向かって」

ナレーション　わたし、伊藤美幸、青春中学３年。高校入試を前にして、勉強に一段と力が入ってきた。目に見えて成績も上がり、希望が丘に入れるという望みも膨らんできた。スランプに陥っていた親友の中井瑠美は、そんなわたしに嫉妬心をあおられ、思わず言ってはならないわたしの生い立ちを怒りに任せて話してしまっ

た。

瑠美　（エコー）あの人たち、あんたの本当の両親じゃないよ！

ナレーション　そんなこと、夢にも思ったことのないわたしは、何をどう考えてよいのか、頭の中がメチャメチャになってしまった。上の空で授業を終えると、わたしの足は塾の今井先生のところに向かっていた。

美幸　先生、わたし、どうしたらいいのか分からないの。こんな気持ち、初めて。

ナレーション　わたしは、せきを切ったように話し始めた。それを聞いていた先生は、静かに話し始めた。

今井先生　美幸さん。確かにあなたにはショックだったということは、よく分かるわ。中井さんに一緒に喜んでもらおうと思ったのに、受け入れられないだけでなく、自分の出生の秘密まで聞くなんてね。あなたのお話聞きながら、以前読んだある本のこと思い出してたわ。三浦綾子という人の書いた「氷点」という小説。主人公の出生の秘密を通して、人間の罪ということを鋭く描いたものだったわ。最近よく“いじめ”のこと問題になるでしょ？　わたし、いつも思うの。いじめも突き詰めてゆくと、人間の自己中心の罪というところに行き着くんじゃないかって。中井さんだって、あなたの何から何まで憎らしく思っているのではないと思うわ。彼女も自分の問題で息詰まって、どうしようもなくなったところへ、喜び一杯のあなたを見て自制心を失ってしまったんじゃないかな。目の前のあなたを思いっきりいじめてやりたい、そんな衝動に駆られて、ついあなたに言ってしまったのよ。今は彼女自身も、そのことで苦しんでると思うわ。赦(ゆる)してあげて。そしてご両親に、勇気をもって聞いてごらんなさい、あなたのこと。

ナレーション　わたしは、先生の言葉に勇気づけられて、家路に着いた。

美幸　ただいま。

母　お帰りなさい。もう少し待ってね。食事の用意、間もなくできるから。平塚の叔母さん、久しぶりに来るんですって。食事一緒にすることになっているからね。

ナレーション　久しぶりで両親と叔母も交えての夕食だったが、わたしはどうしてもみんなの楽しい会話に合わせることができず、つい黙ってしまいがちだった。そのことを感じ取った叔母は、食事のあと、わたしの部屋に来た。

叔母　美幸ちゃん。入ってもいい？

美幸　どうぞ。

ナレーション　わたしは思い切って、自分の出生について、この叔母に尋ねてみた。叔母は驚いたようだったが、少し考えて話し始めた。確かにわたしは養女であること。6か月で今の両親に引き取られて育てられたことなど。そして詳しいことは両親に直接聞くようにと言って、部屋を出ていった。

母　美幸！　こちらにいらっしゃい！　お話ししたいことがあるから。

ナレーション　母の声で、居間に行くと、父もいて、何か緊張した空気が感じられた。

父　今、叔母さんから聞いたよ。お前が養女だということを友達から聞いたんだって？　恐らく中井君のお嬢さんからだろう。彼には、わたしが折をみて言うまで、決してお前に知らさんように頼んでおいたんだが…。美幸、それは本当のことだ。もちろん、いつまでも黙っているつもりはなかった。お前が高校にでも入ったら、言おうと思っていたんだよ。いや、実際にわたしたちは、このごろはお前が養女だなんて意識がなかったんだ。これは本当だよ。しかし、今まで黙っていたことが、結果的にお前をひどく傷つけることになってしまって、悪かったね。

母　お父さんの言うとおり、美幸はわたしの子よ。本当の子ですよ。

ナレーション　父の話してくれたことはこうだった。わたしの実の父母と今のわたしの父とは、仕事上の仲間であったこと。実の父は仕事がうまく行かず、ついに倒産してしまったこと。心労と過労で、わたしを産んで母は間もなく亡くなり、父は仕事の後始末で赤ん坊のわたしをどうにも一人で育てることができず、わたしの父母に託したこと。子供のいなかった父母は、わたしを精一杯の愛情で育ててきたこと。――わたしは、父の話を聞いているうちに、わたしがこの両親に心から愛されていることを改めて思った。何よりも、今の今まで、ただの一度も、わたしにこの両親のほかに実の父母がいるなどと疑ってもみなかったことが、そのあかしではないだろうか。わたしは次第に落ち着きを取り戻し、改めて学校生活に心を向け始めた。瑠美かたら手紙が届いたのはそんな時だった。

美幸　（手紙を読む）「美幸、本当にごめんね。あなたを傷つけてしまって。（途中から瑠美の声に）今井先生と先日話したの。先生、聖書を開いて、『喜ぶ者と共に喜び、泣く者と一緒に泣きなさい』というところから教えてくれたの。わたしはあの時、喜んでいるあなたと一緒に喜べなかった。それどころか、ひどい言葉で突き刺した。赦してね、美幸。今度こそあなたと、喜びと悲しみを一緒にできるようになりたい。そうしたら、本当の友達になれるものね。今井先生ね、わたしにイエス・キリストのことを教えてくれたの。敵をも愛して、十字架にかかるなんて、すごいよね。わたしね、母からあなたのお父さんのこと聞いていたので、ふと思い出したの。イエス・キリストのような人なんだなって。」

ナレーション　わたしは、父がイエス・キリストのようだと言う瑠美の言葉に、少し戸惑った。確かに父はいい人だが、イエス・キリストのようだって、少し大げさじゃないかなぁ。そしてわたしは、両親の配慮で、実の父と会うことになった。それは、中学の卒業式を終えた日だった。

実父　君が…美幸かい？　本当に美幸なんだね？　生きていてよかった。こんなに大きくなった君を見ることができるなんて。

美幸　わたしは、あなたのことは何も知らされていません。今の父と仕事仲間だったこと以外は。

実父　　わたしの会社が倒産した時、本当に伊藤さん、そう、君のお父さんにはご迷惑をかけたんだよ。幾つかの子会社も巻き添えにしてしまったんだが、伊藤さんの会社は、その中でも従業員をたくさん抱えて、一番大変だったんだ。お母さんは君を産んで死んでしまうし、残されたわたしは、もうどうしようもなかった。君を道連れに自殺しようと覚悟を決めた時、わたしの様子に気づいた伊藤さんが、見かねて君を引き取ってくれた。それだけじゃない。一番の犠牲者である伊藤さんが、かえって親身になって債権者の人たちに謝ってくれたばかりか、自分のお金も投げ出して社員の面倒を見てくれた。お陰でやっとわたしは死なずに済んだんだ。

ナレーション　　わたしは、瑠美が乳のことを「イエス・キリストのようだ」と言った意味が、やっと分かったような気がした。

実父　　そんなこともあって、伊藤さんの会社もとうとう倒産してしまい、今の会社に勤め始められたんだ。あれから 15 年、伊藤さんご夫妻には、どんなにご苦労が多かったろう。わたしもなんとか生きてきたが、君のことを思わない日はなかった。こんなに立派に成長した君を見て、生きていて本当によかったよ！

ナレーション　　わたしは、実の父に話したいいろいろな思いがあるようでいて、結局何も話すことができなかった。ただ涙に暮れる父の顔をじっと見つめるばかりだった。
その夜のこと――。

父　　美幸、本当のお父さんと会って、どうだった？　何を話したんだい？

美幸　　いっぱい話そうと思ったのに、なんにも。本当はわたし、父に会ったら、何かきついことを言ってやろうと思っていたの。だけど、本当のこと聞いた時、何も言えなくなっちゃった。あの人、本当に喜んでいたの。「生きていてよかった」って、目にいっぱい涙を浮かべて繰り返し、繰り返し言うんだもの。わたしも…泣いちゃった。でもよかった。だって、あの人に会って、お父さんのことよく分かったもの。わたし、本当に両親から愛されているんだなって、納得できたもの。本当に困っている人に、お父さんは大きな犠牲を払って助けてあげたんだね。そして、わたしやあの人の命を助けてくれたのね。お父さん、お母さん、ありがとう。

母　　美幸、わたしたちも、あなたによっていろいろと慰められてきたのよ。お父さんは、途中から別の会社に勤めることになったので、始めはイヤな思いをすることもあったの。そんな時、あなたが家中を楽しくしてくれてね。本当にうれしかったわ。あなたはわたしたちの宝物。お礼を言うのはわたしたちのほうよ。ね、お父さん？

ナレーション　　4 月のある日、わたしは久しぶりに塾の今井先生に会いに出かけた。そして、瑠美との和解のこと、実の父に会ったことなどを知らせた。

今井先生　　そう、よかったわね。本当によかった。美幸さん、あなたのために、すばらしい

プレゼントを贈るわね。聖書の言葉よ。「友はどんな時にも愛するものだ。兄弟は苦しみを分け合うために生まれる。」箴言 17 章 17 節。これはあなたと中井さんの友情のためよ。それからもう一つね。「キリストは、私たちのために、ご自分の命をお捨てになりました。それによって私たちに愛が分かったのです。ですから、私たちは、兄弟のために命を捨てるべきです。」ヨハネの手紙第 1、3 章 16 節。ご両親の暖かい愛に触れたあなたが、このイエス様の愛を信じることができるように、祈ってるわよ、先生。

美幸　“命を捨てる…愛”か…。

ナレーション　わたしはその時、“人生で一番大切なことを今、わたしは学びかけている。”―しきりにそんな気がしていた。

＜完＞